短歌

短歌は和歌の一形式であり、我が国独自の古来から日本文学史を貫いて来たもので、長歌・旋頭歌・片歌・仏足石歌の多様の和歌形式が有ったが、短歌のみが優勢化して平安時代からはすでに和歌は即ち短歌と考える様になり、現在に及んでいる。我が国の生活や風土気候をひとつの詩形として詠む様になってきたので有る。

◇**短歌の歴史**　は次の四期に分かれている。

第一期・・万葉集を中心とする時代（三一三～三九九年）の（大和・飛鳥・奈良時代）の約四五〇〇首の歌が収録されている。
歌人は柿本人麿・山上憶良・山部赤人・大伴旅人等

第二期・・古今和歌集の時代で有り、（八九七～九三〇）の醍醐天皇時代でその歌風は万葉集の素朴さから優美・繊麗で有る。新古今和歌集は（一一八三～一一九八）頃から後鳥羽上皇の時代で優雅な歌風で技巧が多く用語が洗練されている。
歌人は紀貫之・紀友則・藤原俊成・藤原定家・藤原有家・藤原家隆・西行・源実朝等など

第三期・・江戸時代になり、鎌倉室町時代の武士や隠者達の短歌が衰退し始め、短歌の革新運動が起こり万葉集の復興・古今集の新解釈が付され清新な歌の調子が取り戻され始める。
歌人は賀茂真淵・田安宗武・香川景樹・良寛・橘曙覧等が活躍した。

第四期・・明治以降現在までの時代で有り、外国文学等の影響を受け新しい波が起こり明治三十年代には宮内省派・御歌所派と呼ばれる旧派和歌を打破して新しい短歌の歩みが開始された。
歌人は与謝野鉄幹・正岡子規・北原白秋・石川啄木・与謝野晶子・佐々木信綱・若山牧水等など

◇**短歌の性格**　は形式上五・七・五・七・七の五句三十一文字より成り立つのが一般的な決りとしている。
五音七音の短句長句を二回繰り返し最後に長句で結ぶ形式は感情を表現する叙情詩として日本人の呼吸に自然な長さであるといわれている。次に短歌の内容はその根幹は生活感情の真実の表現であり、喜怒哀楽を中心にして単純の中に奥深いものが要求され、それが豊かな連想や暗示を与え短歌は国民の歴史を写す鏡の役割を果たしているので有る

◇**短歌の作り方と味わい方**

最初の五音・・初句　次の七音・・第二句
次のが五音・・第三句次の七音・・第四句
最後の七音・・結句　と呼ばれる。

此の五句は意味や調子の上で句に切れ目のない一続きのものや、五七・五七・七、の様に切れる五七調や七五調の五七五・七七の切れるものが中心に様々の場合が有る。これらの表現は漢詩の起承転結の法則に共通している。
初句は軽く結句は重く徐々に高まる調子を強くしっかり歌いそえる事が大切である。只最近では表現の必要から三十一文字の定形を破り、字余り、字足らず（破調）も許されて、現在では当たり前の様に成ってきている。

▽例題・・教本記載の中より・（A形・B形・C形）有り。
（天の巻）

A、田子の浦ゆ　打ち出でて見れば　真白にぞ　「山部ノ赤人」
　　不二の高嶺に　雪は　降りける

B、やはらかに　柳青める　北上の　「石川　啄木」
　　岸辺目に見ゆ　泣けと　ごとくに

C、幾山河　こえさりゆかば　淋しさの　「若山　牧水」
　　果てなん国ぞ　今日も　旅ゆく